

本多忠勝勇猛伝

安政四年(一八五七)

巳十月出来

三州宝飯郡

長澤中組

近藤金作

三州宝飯郡長澤：現在、愛知県
豊川市長沢町

本多忠勝勇猛伝



目録

一 長久手後度軍 家康公

御先勢敗走付本多忠勝絶類の

働き并二秀政大敗軍之事

一 高木清秀勇言付森武蔵守長一

公の御旗本をおそふ并平松金次郎

先登之事

本多忠勝勇猛伝

長なが久く手て後度軍 家康公御先勢

敗走 付本多忠勝た働かき秀政ひて大敗まさ

軍之事

斯(かく)て堀ほり久太郎秀政ひてまさは備を配くりてハ

敵軍の掛り来るを相待て一軍すへし

と陣せし所ニ水野惣兵衛忠重た・岡部おかへ

堀久太郎秀政（一五五三丁九〇）：織田信長に仕えた後、豊臣秀吉の家臣。

水野惣兵衛忠重（一五四丁一六〇）：織田信長に仕え、後に徳川家康の臣となる。

弥次郎長盛・なかもり 榊原小平太康政等さかきか
 三備に敵の惣大将ミ三好秀次よしひてつく一万余
 人の大備を切崩しくつ勇進いさみすんで備へ
 をも立すきひしく追立くおし
 来るを見て秀政ひてまさにつこと笑ひて
 老臣堀監物ほりけんもつ同丹後守直寄たんこ父子なおよりに
 下知して流石さすかに軍功者かうしやの三州勢
 も今日の戦ひに勝かちほこりて備へも立す

岡部弥次郎長盛（一五六八～一六三二）
 二）：徳川家康の家臣
 榊原小平太康政（一五四八～一六〇六）
 六）：徳川家康の家臣
 三好秀次（一五六八～九五五）
 豊臣秀吉の甥で養子

堀監物（一五四七～一六〇八）
 堀直政。織田信長に仕え、後に堀秀政・秀治に仕える。
 堀丹後守直寄（一五七七～一六三九）
 堀直政の二男。堀秀治に仕える。

まばらになりしそや急いそき汝等人
数をくり出して追戻せと下知
しけるに元来ゆうもうの丹後守そくし即時に
指揮しきして敵軍を追ひ戻もとさんとし
ける所に秀次ひてつくの敗軍追かけ来り
其一番は榊原小平太康政やすまさ、其身
まつ先にすゝんで追かけ来るに高たか
根山ねの森陰もりかげより浅黄地あさきに蛇しやの目

と向ふ梅の紋付たる旗一流おし
出すと見へけるか三百挺てうの鉄炮てっほう筒(筒)先さき
を揃そろへて玉繼つき早く打欠かゝる、然るに此節
備へをも立すに足を乱して追かけ来り
し榊原康政さかき やすまさか兵士大勢打倒たをされ
て進み兼る所に堀丹後たんご守下知
して三千余人太刀・鎧の切先をそろ
へて鯨波とぎの声を揚こえげ平一面ひらにおし

かゝるによつて榊原か兵士へいし八思ひの外
なれ八いよくすゝ三得す所に萌黄糸もへきいと
の鎧よろひに星兜ほしかぶとを着して天突てんつきのさし
物したる武者一騎き大身の鎧やりを馬の
平首に引添て大音上に堀秀政ほりひてまさ
か老臣たんこ丹後守直寄なおよりと名乗り真一文
字に突かるを見て三千余人の
従兵しゅうへいいかてか猶豫ゆうよすへし、勇進いんしんん

て我おとらじと突かゝる、然るに
軍功者かうしやの榊原康政やすまさ大音上に敵てき
すてにあらて新手大勢にて引かゝる
然れ八戦ひ是非に六ツかしかるへし
面々馬より下り立、敵軍間近く来る
明(時)無む躰たいに馬足をなきはらひつぎ〈突
破やぶれと下知して丹後たんこ守八あらて新手三千
余騎にて榊原か三百余人をまん中に取
こめて八方よりきひしくせめ

立る、此節康政やすまさ下知して三百余人
一同におし懸りて苦戦くつせんす、小平太
康政やすまさまつ先に進んで丹後守の
馬印を八目当あてに命を惜おしますいと
み戦ひけるか直寄なをよりも士卒しそつを下知し
はけまして此敵八無下に小勢なり
皆殺ころしにして三好みやう殿のいきどをり
をはらすへしと其身も鎧取て相働く

然るに康政・直寄相ともに勝れたる
勇敢健気なる究竟の将なれば相
互ひに此所を追立らるゝは後日に
人前なるへからず只々敵に取付次第
に討死せよとおめきさけんで責戦
ふ此時に八榊原か片輪車の紋付
たる旗と堀直寄か釘貫の紋付たる
旗と結ひ合たる如くなり、然れども

康政やすまさ 八今朝より 数度すどの懸合ニ兵士
ことくく戦疲つかれ叶わすして色いろ
めくを康政やすまさきつと見、九尺柄えにて
長身の手鐙を振ふりかさして馬をのり
居すへ大音上にめんく未練れんの働き
見苦くるし 康政やすまさ 此所にて討死し
冥途黄泉めいとかうせん におみて 君恩くんおんを報ほうし
奉るへしと呼わりなからむらかる

多勢の敵中へ乗入て当るを幸ひ
に突落しくゝて一人当千の勇
をふるひ四角八面に乗廻りくゝて突
戦しける所に手疵二ヶ所をかふむり
たれともいさゝか氣を屈セすますくゝ
精神をはけまして敵を追立くゝ

苦戦するによつて鳥居傳十郎・松平

助十郎・坂部又七郎・関金平・原田

鳥居傳十郎…不詳
松平助十郎…不詳
坂部又七郎…坂部正定(一五五五)
八七?徳川家康の家臣
関金平…不詳
原田権左衛門(生没年不詳)…原田
種明カ、榊原康政の部兵

権左衛門・中根善次郎・大津七右衛門・
 大久保新七郎・同久右衛門等各々勇
 をふるふて苦戦すれとも丹波守か
 備堅くして其身力戦しなから
 士卒を下知してはけましける八此時
 を失わす日頃の武勇八此時に顕わる
 るそや、榊原を討て手柄にせよと
 呼わりけれ八心得たりと短兵急に

中根善次郎：不詳・中根善二郎、
 天正五年武田勝頼と戦う。
 大津七右衛門：不詳・大津半左
 衛門とは別人か。
 大久保新七郎：不詳
 大久保久右衛門：不詳

もみ立く責戦ひけるゆへ此乱軍らんぐんの
中に大久保新七郎・同久右衛門等は
討死す、かくのことくなれハさしもの
康政やすまさも既すでにあやふく見へける所に
小幡こはたの城より本多彦次郎 康重やすしげ
二百余人を引率いんそつして馳はせ来りて
直寄なおよりか備えに会尺しゃくなく突入く
豎横しゅうわうに突廻り必死ひつしをきわめて

本多彦次郎康重（一五五四～一六一一）……三河岡崎藩初代藩主

いとみ戦ふニよつて此節丹後守下知
して三千余人を二手にわけて
一手八榊原と戦ひ、一手八本多康重
と火花をちらしておめきさけんて
いとみ戦ふ、鯨波の声天地に響き
おひたゝし、かくて半時計りも
責戦ひけるに堀丹後守八三千余人の
多勢なり、榊原は三百余人、本多

康重^{やすしげ} 八二百余人、都合^{つかう} 五百余人の小勢
なれ八戦ひ疲^{つか}れて彦次郎か二百
余人も榊^{さかき}原か三百余人も色めく
所に丹後守は乗^{のり}に乘^{のり}てもみ
立^たく一人も余^{あま}さしと戦ふ所に
岡部^{おかへ} 弥次郎 長盛^{ながもり} 八二百余人を下
知して駈^{かけ}来る、丹後守か左りの
方より横鎧^{よこやちり}を入れて相働く、是に

氣を得て康政やすまさ・康重しげ兩人も手勢
を下知して突戦とつせんするによつてさし
もの丹後守か三千余人の軍兵なれ
とも榊原さかきと本多・岡部等の七百余
人の小勢にまくり立られ堀ほりか旗
の手東西とうせいに開ひらきなびくと見へ
けるがこらへかねて一町計り引退しりぞく
此時の物わかれを幸さいわひに榊原さかき

康政^{やすまさ} ・ 本多 康重^{やすしげ} ・ 岡部 長盛^{なかもり} 等の

三将人数をまとひ一手に備へて
引退くを見て丹後守か軍兵
ともすわや敵兵退くそや、追打ニ
すへしと争^{あらしそ}ひすゝんて追ひした
ふを見て堀監物直寄^{ほりけんもつなをより} 下知して
時節八今なりと二千余人をすゝ
めておしかゝる、戦^{つか}ひ疲れたる榊原^{さかき}・

本多・岡部等三人の窮兵きうへい八百人に
足たらさる小勢を皆殺みなころしにすへしと突
かるによつて三人手せいは堀直政ほりなをまさ
新あらて手二千人もみ立られ右往うわう
左往さわうに散乱さんらんして返し得ず大
くすれになりけれ八小平太やすまさ康政
大きにいかり憤いきとをり言、甲斐かいなき味方
の形勢ありさまかな、いてく康政やすまさ打死して

此敵を追立へしと馬の頭を引
かへしけれ八本多彦次郎康重やすしけ
諫いさめける八凡戦ひの勝負せうぶは武
門の常也、よつて貴辺なかもりと長盛ながもりの
人数は戦ひ疲つかれたれ八我等ちんかり後殿
すへし、両人はいそぎ引取御本陣
へ言上して御旗本衆をもつて打
破やぶる事難かたき事や有へし、はや

疾々といさめ諭してたんくくに
引取らせ身八跡に乗下りて静々
と退く所に監物直政・丹後守直寄
父子は五千余人を下知して敵に
息継せず追ひ打にせよと短兵
急に追かけ進む、彦次郎康重八
屍目に白眼で敵間近くなると
ひとしく引かへし二百余人を

下知して其身真先にすゝんて

もみ立くいとみ戦ひけるに直政なを まさ・

直寄なをより父子ふしは同じく下知して敵は

戦ひ負けて疲つかれたる小勢なり

勝かちほこつたる味方ミかたの大勢と争戦そうせん

するは命いのち知らすの愚く人なり一人も

残のこらす討取連ヒれと無駄むたいに進んで

戦ふといへとも康重やすしけ少しも屈くつせず

四角八面に乘廻りく力戦しける
に其身きんせき金石にもあらず両度かけ
合七か所手負おひ疲つかれたるゆへ太刀
を杖つへに突つて息継いきつきなから手勢を
見れ八始はしめは二百余人なりしかたん
く討死して残兵八わつか
武者三十余きほそつそう騎歩卒雑人とも彼かれ
是これ七八十人残りたれ八康重やすしけにつ

こと 打笑うちわら ひ 天晴汝あつはれなんし ら 八 無双むそう の 勇 士
 な り と て も の 事 に 今 一 度 敵
 中 に 馳かけ 入 最期さいご の 一 戦 を こゝろ よ く
 討 死 す へ し と 身 繕つくろ ひ す る 所 に
 大 須賀すか 五 郎 左 衛 門 康高やすたか 八 味 方 の
 先 せ(勢)はいい 敗 ず る と 聞きて 大 波なみ の 打 か 如 く
 に 馳かけ 来 り 鯨波とき の 声こゑ を 揚あげ て 突
 入 れ 八 其 手 の 従兵しゅうへい 久 世 三 四 郎 ・ 坂部さかへ

大須賀五郎左衛門康高(一五八〇
 八九)：徳川家康の家臣

久世三四郎(一五六〇～一六二〇)：
 久世広宣といい、大須賀康高率
 いる「横須賀衆」の一人
 坂部三十郎(一五六〇～一六三〇)：
 坂部広勝といい、大須賀康高率
 いる「横須賀衆」の一人

三十郎・渥美源吾・鷺山傳八郎・曾根
あつみ わし そね
 兵右衛門・丹羽弥五郎・同金十郎・岡三郎
に八 おか
 右衛門已下大剛の勇士我おとらしと
かう ゆうしわれ
 鏝先をそろへて突戦す、此節榊原
やり とつせん さかき
 小平太康政・本多彦次郎康重・岡部
やすまさ やすしけ おかへ
 弥次郎長盛・水野惣兵衛忠重等の
なかもり たゞしけ
 面々駈合せてもみ立く戦ひける
かけ
 ゆへ流石の直政・直寄父子も此
さすが なをまひし なをよりふし

渥美源吾（一五五七？）…渥美勝吉、徳川家康に仕える。
 鷺山傳八郎（生没年不詳）…大須賀康高家臣
 曾根兵右衛門（生没年不詳）…曾根長一？
 丹羽弥五郎（生没年不詳）…丹羽氏吉？
 丹羽金十郎（一五四八～一六二八）…丹羽氏広、徳川家康に仕え、大須賀康高に属す。
 岡三郎右衛門（生没年不詳）…不詳

剛勇^{かうゆう}にもみ立られこらへかねて
引退くを見て 徳川衆八氣^きに
乗て追立くすゝむ所に安昌寺^{あんせう}の
並木^{なみき}ニ備たる堀久太郎^{ほり}秀政^{ひてまさ}八五千
余人を下知してときの声^{こえ}を揚^{あけ}て
おしかけるを見て監物^{けんもつ}父子大きに
力を得て引返す、夫のみならず秀政^{ひてまさ}
の敗^{はい}くんも所々方々より駈集^{かけあつま}り

雲霞うんかのことし、是これによつてさし
もの 徳川とくかわ衆も是非ニおよハす
して四角八面にかけちらされて集あつまり
得す、然る所に此節
家康公ハ長久手ながくての藤山ふしに御本陣
を居(すゑ)給ひ御先手の戦ひ如何と思召
所に榊原康政・岡部長盛等兩人
朱あけに染そみて返し来るゆへ諸人大きニ

驚おどろき見るに両人共ニ数ヶ所手負おひ
たり、扨又 家康公も彼かれ両人か引取
来るを御覽らんし其うへ御先手軍利
なく敗はいして散さん々に成たるよし
なれハもしや汝ら討死せしや、さも
あらハ我に手足なきか如しと思召
ところに手負おひなからも引取来る事
うれしく思ふなり、但し康高やすたか・康重やすしげ・

忠重たしげ等らいまた引取来らす、かれら如何

したるや心元なしと仰けれ八康政やすまさ

畏かしこまりて三好秀次みよしひてつく一万余人の大備を切

くつし追立く既に備を乱して

追かけ進む所に堀久太郎ほりひてまさ秀政ひてまさか

先勢けんもつ監物けんもつ父子か五千余人都合一万

余人の新手あらてといとみ戦ひ見苦くしき

はいくんすみやかに討死仕るへしと

存詰候へとも御大事の節其手ニ合
奉らさるも不忠ちゆうのいたり候へ八な(誤写)んじ(汝)さんじ
の命生延のひ候、但し大須賀すか・本多・水野
等の三人は上野猪いの越原こしの方へ引退しりぞキ
候と言上しける所にはや堀ほりか手の
軍兵一万余人鯨波ときのこゑを揚あけて
おし来るやうすなれハ
家康公本多忠勝たつかつを召てなんしハ

本多忠勝(一五四八〜一六〇〇)……徳川家康の家臣、徳川四天王の一人

手勢を引率いんそつして堀ほりか手先に駈はせ
向ひ候へ、我また跡より旗本備へをくり
出すへしとの御下知によつて本多
平八郎 忠勝畏たつかつかしこまりて即時そくしに手勢
五百余人を下知しておし出しける
其日の出立八紺糸こんいとおとしの厚鎧あつよろひを
着ちやくし同毛の兜かぶとに鹿しかの抱角たきつのの前立
物にしたるをいたゞき黒馬の八寸

飾りの高足に黒塗ぬりの鞍くら置て
打乗り家宝かほうの名鑑蜻蛉切めいやりとんほうきりを
馬上に打振ふりり手勢にはなれて
唯一た騎まつ先に進すみすてに
堀ほりか先勢と其間半町計二なると
ひとしく秀政急度ひてまさきつと見てすわや
かれ八徳川家にて随ずい一の驍勇けうゆう
本多忠勝たつかつなり、其身みた唯一騎乗のり

間に馬武者十三騎ほそつ歩卒ほそつ四五十人
打はたし半死はんしはんせう半生の者とも八
百五六十人ニおよひけり、然るに五百
余人の手勢もつゝ続き来りて忠勝たかつか
為に死亡しほうせし輩ともからか首を取、其外
いまた死しせず倒たをれ伏ふしして居いたる
者とも皆みなことく首を討取、かく
て此節本多忠勝たかつ一人の働はたらきを

もつて丹後守か三千余人の軍兵
あるひ八討れまた八手負おひ其外
多く八逃失にけうせて三千余人ありし
従兵しうへいも相残りたるは六百人に八過さり
けり、然るに此者とも本多か手並なみに
恐怖きやうふして進すすみ得ず、秀政ひてまさ大躰ていを
見て大きにいかり、たとへ本多な
りとても鬼神きじんにもあらず惣勢一

同におし懸りて討取れと下知
して、本多か持旗もちはた八紺地こんちに白く
立葵たちあをいの紋もん付たるを目当に五千
余人ときの声をあけておし来る
秀政ひてまさ八向ふをきつと見れ八長久手ながくて
藤山ふしに松杉の木陰こかげに
家康公の惣白の葵おふひの御紋付たる
御旗と金の七本骨ほねの御馬印は

照る日に光り輝きけり、然るに堀
秀政か五千余人八家康公御自身
此所に備させ給ふ、聊か知らさり
しに今始めて御旗御馬印を見て
大きに驚き殊に本多一人の英
武によつて味方先勢敗軍し
けるに今徳川殿御自身新手にて
おし来り給ふそやとさわき

旬

仰きやうてん天てんして戦いくさわさる前まへにはや
 敗走はいそうしたる形勢ありさまにて備そなへ野白のしろに
 なつて進すすみ得えず、扨ひてまた秀政ひつまさも
 本多一人ほんたひとりか為ために先勢せんせい三千余人さんぜんよにんの
 備そなへを切崩きりくづされ、其上そのかみかねてより
 家康いえやす公こうは和漢わかんに秀給ひいてひし神しん
 変英才へんえいさいの御大将ごたいしやうなる事こと八知やちり透す
 したれ八是やち又大またきに驚おどろき恐怖きやうふ

野白「野面が見えないほど。密
 集していた人が野面が見えるほ
 どまばらになること。」

して此所に御在陣と八思ひも
寄らすうか〈と長^{なか}追^{おい}ひして我
なからも不^{かく}覚なり、今は如何とも
すへきやうなし、勿^{もちろん}論^{そこつ}卒^そ忽^{こつ}を掛り
て追立らるゝなと下知しなから
上野猪^{いのこし}越原の方を見^み渡^{わた}けれ八色
々の旗^{はた}数十流^{なか}れ相見へけるゆへ
秀^{ひて}政^{まさ}いよ〈驚^{おどろ}き仰^{きやう}天^{てん}して扨^な八

徳川殿の謀略ほつりやくに落入おちいりたり、既にすてに
先刻せんこくより戦ひ困こんしたる窮兵きうへいを
もつて徳川殿の新手あらてに敵
せん事叶ふまじいそきたんく
に引取り後陣ごしんの池田いけた・森もり等と
一手になつて軍すへしと思ふ
所に秀政ひてまさ陣中しきりに騒さわき
立て色いろめくやうす家康公

御覽らんしてすはや敵軍敗走はいそうの色
あらハれたり、いそき駈かけ合て一同に
軍をいとみ候へとの御下知によつて
御旗本はたもとの英士えいし各々鎧やりとつて一同に
進み懸る、然るに元来引心付たる
秀政ひてまさか五千余人は一戦にもおよはず
敗北はいほくす、此節堀久太郎秀政ひてまさ并ニ
監物けんもつ丹後守父子も心もやたけに

おもゑともすへきやうなく池田・

森と一手になるへしとて久太郎

秀政ひてまさ八馬ま八廻り八つかに三百人計りを

従したがへて退きけり、然るに此節森もり

武蔵守むさし・池田勝入せつじゆう等八岩崎までおし

付秀政はいくん敗軍のよしを聞き大きニ

驚おどろき長久手ながくてに向ておし来る

藤山ふしの在(東)三町計をへたてゝ備へけり

森武蔵守(一五五八〜八四)…森長可(長一)、織田信長に仕えるが、長久手の戦いでは豊臣秀吉方につく。
池田勝入(一五二六〜八四)…池田恒興、織田信長に仕えるが、長久手の戦いでは豊臣秀吉方につく。

抑森・池田等八先日らくてん樂田の戦ひに

敗軍はいくんしたる事を深くふか恥憤はちいきとをり

此度おかさき岡崎の城責落さすバ生て再ふたゝ

ひ帰陣きちんすましと覚悟かくこしける

より扱こそ武蔵むさし守長一なかがつ・池田勝入

両人八詞こと八のことく討死うちじにしけり

高木清秀きよひて勇言ゆうごん付森武蔵守もりむさし

長一公ながかつの御旗本をおそひ并平松

高木清秀（一五二〇～一六一〇）：織田信長の臣水野信元に仕え、後に佐久間信盛に属したが、織田信長死後に徳川家康の家臣となる。平松金次郎（一五六〇～八七）：徳川家康の家臣、後に豊臣秀吉の家臣。

金次郎先登の事

去程に此節 家康公御旗本
勢を進め堀久太郎秀政か五千余人
を追ひ立給ふによつて久太郎か
軍兵ともこらへかねて四角八面に
散乱して敗軍す、仍て此時に八
徳川衆も備を乱して追討すへ
しといさみ進みける時ニ御旗本の

武者奉行内藤ないとう四郎左衛門正成まさしげ八
 家康公の御旗本備乱みたれて八如何と
 思ひける所ニ御旗奉行渡邊わたなへ半蔵・
 算助かけひ右衛門等の兩人内藤正成まさしげに
 向て申ける八我々今岩崎の方
 を遠見とうみしける所に煙塵えんちんおひたゝ夥し
 く天におゝひ味方陣営じんえいになび
 きかゝる、是ひとへに森・池田か

内藤四郎左衛門正成（一五八〇—
 一六〇〇）永禄七年一向宗乱に活躍
 徳川家康に仕え、長久手・関ヶ原
 の戦いに加わる。

渡邊半蔵（一五四—一六〇〇）：渡
 邊守綱、徳川家康の臣。槍の半蔵
 の異名をとった。

算助右衛門：算助右衛門カ（一五
 五五—一六一六）算元成、徳川家康の
 臣。

両勢備を返すと覚おほへたり、仍て
すみやかに御旗本を藤山ふしに立られ
味方の面々足を乱みたして敵の敗軍はいくん
を追かけ進むを招まねき戻もとされ然る
へしといふ、内藤聞尤におもひ即そく
時に石口善次郎を相具くして急いそキ
藤山ふしへ馳登のほり見切して何様も
筧かけひ・渡辺等わたなへか申所尤なり、当所より

石口善次郎…不詳

御旗本まで八はるか谷を隔^{へた}てた
 れ八御辺八此所に御旗を立られよ
 我等八御本陣へ馳^{はせ}行^{こん}言^{こん}上して
 御人数を此所に進め来るへしとて
 四郎左衛門信成^{のふしけ}八只一騎^き乗出して
 早束御旗本ニ乗付ていそき御人数
 を藤山^{ふし}へ進められ然るへしと申ける
 時に本多弥八郎正信^{まさのぶ}・天野三郎兵衛

内藤四郎左衛門信成（一五四五～一六二〇）：内藤家長（義弟）、嶋田景信の子。父母ともに異説有。

本多弥八郎正信（一五二八～一六一六）：徳川家康に仕えるが、三河一向一揆に加担し追放され、後帰参し側近となる。
 天野三郎兵衛康景（一五三七～一六一三）：徳川家康に仕え、三河三奉行の一人

康景^{やすかけ}等の兩人御旗本居^い合て内藤
正成^{まさしげ}申出る旨聞て御辺^{へん}八如何なる
しりよ有て左やうの事申出ら
るゝや既^{すて}に御先手のめん〈其外
御旗本備の中よりも駈^{かけ}出〈勝^{せう}
利^りして敵の敗^{はい}せしを追立〈
進みよつて此節御旗本八無^む下^げに
御小勢なり、然るに敵の大軍に御

しりよ=思慮

むかひあらん事八甚たあやふく
よつて此所を御引取ようかい要害の地に
御本陣をうつされ、御先手の面々
返し来るを御待合せ有へき事
こそ然るへしと申ける所に高木
清秀きよひで進み出、かうせい高声に凡小勢を
もつて大軍の敵に軍するに八
無む躰たいに突つきかゝりて味方に

勇氣ゆうきを進むるにおゐて八是非に
勝利を得る物なり、かゝる折おりからに
八一足なりとも退となりて八諸卒しよそつ
の心臆おくして必らず負軍まけいくさする也
然るに各々八軍慮くんによの才覚薄さいかくつすく
拙つたなき事を申さるゝやと其言葉
終おわらさるに家康公御下知あ
つて御旗本備をくり出し給ひ烏からす

挟間さまの峯みねより兵おか(丘)へ御人数をおし
出し給ふに御先手の面々八敗はい
する敵を追ひ慕したふて進ゆへ
御旗本の人数わつか七百余人なり
扱また池田勝入・森武蔵守等か
両将八人数を進めて藤山ふしのはら
二町程ほどおし出して来り、森長一もりながかつ八
三千余人を下知して家康公の

御旗所右におし廻りて見るに
御旗本の人数思ひの外御小勢なれハ
敵軍いまた集り来らざる前に責
懸るに於てハ是非に勝利せうりを得へ
し、然らハ今日の軍にハ必定ひつせう打
勝かちたり進めく下知して其身
真先まつきに進みけり、抑此武蔵守長一なかかつ
剛勇無双かうゆうぶそうの猛将もうせうなれハ三千余人の

軍兵とも勇^{いそ}み進んで 家康公の

御旗御馬印を見^み当^{あて}に無二無三に

突てかゝる其形勢^{ありさま}ハひとへニ疫神^{やくしん}

の荒^{あれ}たるかごとく、然るに此節

家康公、渡邊半十郎・大久保治右衛門・

高木九助・水野太郎作^{さく}・嶋田^{しまた}治兵衛

等へ御むかひ長^{なが}一^{いつ}事世人^{おにむさし} 鬼武蔵

と異名^{いめう}する事今々おもひ知ら

渡邊半十郎（一五四三丁九〇）：渡邊政綱、渡邊守綱の弟
大久保治右衛門（一五三七丁一六一三）：大久保忠佐、徳川家康の家臣
高木九助（一五三三丁九九）：高木正広、高木清秀の弟で清方
水野太郎作（一五四四丁一六一七）：水野清久（正重）、水野元信に属し、後に御家人に加えられる。
嶋田治兵衛（一五四五丁一六三七）：島田重次、徳川家康に仕える。

れたり、備の立様人数配くハりの躰ていまつ
たく家康公か備にかけ入て
一時に雌雄しゆうを決けつすへしと軍備くんひ
なり、然れハ尋常よのつねの如く軍する
ならば必定ひつせうかれか為ために追ひ立ら
るへし、よつて鉄炮てつぽう二百挺玉てうたまつぎ
早はやく打懸く武蔵守むさしか先手を
打立に敵軍漂たふよふ所へ鎧を入て追

立よとの御下知なれ八各々かしこまり畏て

てつほうあしかる

鉄炮足軽 二百人を真先に進め

下知するゆへ皆々つつさき筒先をそろへ

玉たま薬くすりを込こめ替かへくけんちうに打

けんちうに「嚴重に

立るに仍而えんせう焔硝の煙けむりおひ

たゝしく真くらやみに成てしせき咫尺

咫尺を弁せず「視界がきかず、
近距離の見分けがつかない。

も見へさることくなれ八むさし武蔵守か

先勢百五十人打倒たをされたり、かく

の如くして三州勢の打懸る玉に
当りうち殺ころされたる骸かハねは散乱さんらんせし
かことくなり、是によつて武蔵守むさしか
軍兵とも進兼すすみかねて猶豫ゆうよす、此節
家康公しきりに御下知あつてす
わや此図つをはつすな鎧やりを入れて突つき
払はらへくと御下知ありといへとも
御人数各々今朝より度々の懸

合戦ひ疲れしゆへさしも剛勇かうゆう
の徳川衆誰一人進んで追ひ
立んとする人なし、然るに平松ひらまつ
金次郎八諸人に抽ぬきんでまつ先ニ
進みて敵將武蔵守むさしに突かゝる
此時味方をはなるゝ事一町計り
なりしか聊いさゝか敵を恐るゝ気色けしきも
なく馳はせかゝる家康公急度きつと

御覽らんしてすわや平松ひらまつを討すな
 続けつづけくくと頻しきりに御下知ある
 ゆへ鳥居鶴とりいつる之助・布施ふせ孫兵衛・成瀬なるせ
 新次郎等三人弓矢をつかひ透間すきまも
 なく射懸いる所に敵陣の中より
 黒糸くろいとの鎧よろいを着ちやくして黄母衣きほろかけ
 たる武者一騎馳出て山田八郎左衛門
 と名乗なのりりて平松金次郎と鎧よろいを

鳥居鶴之助(一五三九―一六〇〇) …
 鳥居元忠、徳川家康に仕える
 布施孫兵衛(一五五三―一六〇七) …
 布施重次、徳川家康に仕える
 成瀬新次郎…不詳

山田八郎左衛門…不詳

合せて突戦とつせんしけるを家康公
 御覧らんしていよく御下知あつて金
 次郎を討うたすな続けく御声こへ高たか
 く呼よらせ給ふによつて今村百之助
 進んで二番鎧を入れていとみ
 たゝかふを見て松平助十郎馳はせ
 かゝる、続つひて今井九兵衛・小栗又市・
 大岡傳蔵おか・同久蔵・小野浅之助とふ

今村百之助：今村桁之助（一五五
 六～一六二七）今村重長カ、寛政重
 修諸家譜に「天正十二年長久手
 の役に平松金次郎某、鳥居金次
 郎某一番鎧を合せ、重長素肌に
 してすゝみ、二番鎧をあわす」と
 ある。

今井九兵衛（一五三丁九五）：今井
 信俊、武田家家臣後に徳川家家
 臣
 小栗又市（一五二七～九〇）：小栗吉
 忠、松平広忠・徳川家康に仕え
 る。
 大岡傳蔵（一五五丁一六四）：大
 岡清勝、徳川家康に仕え近侍
 大岡久蔵（生没年不詳）：大岡正
 成、傳蔵弟
 小野浅之助：小野親光（一五五七
 一六四）カ

五騎の勇士一同に突かゝるを見て
武蔵守か兵士二十騎計り争ひ
進んで駈かけ合せ火花ひはなをちらしていとみ
戦ひける、此時に八家康公
御旗本の人数無下むげニ御小勢成八はな
八た危ふきゆへ各々必死を覚かく悟
なれ八相たかひに助け合事なく至極
なんきの戦ひなり

一向宗一揆き蜂起ほうき付御譜代衆御敵ふたい

となる安津木坂軍あづき

家康公御出馬之事

(一五六三)

永禄六年には元康公御諱字いみなじを御改あらため

家康公と名乗なのらせ為ふ、然る所ニ不慮りよ

の子細しさいあつて御譜代衆ふたいの中にて

一向宗門の面々君命くんをそむきて

宗門を尊たつとみ御敵なつて御領りょう内佐さ
崎さきの上宮寺くうじ・針崎はりの称せう(勝)まん(鬘)
本誓せい(證)寺三ヶ寺は一向宗門にて国中
無双の大寺にしていつれも檀越たんゑつ多く
御譜代の中には一向宗門多く彼の三か
寺は檀越たんゑつゆへ三か寺を岩いわとし取
立て農工商のうかうせうの事も一向宗門の者共
皆々催促さいそくす(に誤写力)応しおもひくほに菩

提所たいしよの三か寺に楯籠りたてこもて一揆きを企くわて
家康公に御敵対たいする事誠ニ離論絶りろんせつ
類の珍事ニして家康公の憤いきと(を)り
大かたならず、扨こそ此騒動そうどう平均せさ
るの間は所々方々にて同土軍とし止時やむとき
なし、然る上は此時針崎称満寺せうまんじに
楯籠りたてこもたる一揆きの輩千余人にて
上和田の要害ようかいを責破せめやぶるへしとおし

よせる、然る所に彼所は大久保五郎左衛門

大久保五郎左衛門忠俊（一四九九—一五八一）…松平清康・広忠、徳川家康の三代にわたって仕える。剃髪後浄玄という。

忠俊たくとし父子兄弟ならひに其家かじう従したがに彼

これ漸やう々百八十余人籠こもり居けるか一

揆きす既でにおし寄せ来る、きいて安津木あつき

坂といふ所に出張して相図のろ（狼）し（煙）の粮烟を

揚岡崎江告げるゆへ

家康公御覽してすわや上和田に

一揆き原かおし寄せたるとや、いてく

一揆原＝一揆輩
いでいで＝さあさあ

後卷うしろまきして大久保くほをすくふへしとて
御人数わつか五百余人を引率いんそつし給ひ
御馬を進め給ふ所に扨また針崎はりさきの
一揆き原は上和田の大久保くほ一党とう小勢に
て出張てはりしたる八運うんの究きめなりと侮あなとり
備も立すまつしくらに責欠る、大久保くほ
八一揆きの輩ともからか責欠るを見、敵は大勢
味方は無下に小勢なれ八地利を

見立て一戦すへしと思ひしまゝに敵を
おひき寄せ一時にきひしく鉄炮てつぽうを
打懸るに(よ 誤写)ふつて一揆き原か手負おひ
死人多かりし、此ゆへに進みかねて
猶豫ゆうよするを見て大久保くほ一党とうはいよ／＼
乗に乗りて我先にと進んでむ
らかる一揆きのまん中を会尺えしやくも(衍字)もなく
突入しいとみ戦ふ所に惣白御旗金

の扇の御馬印をまつ先におし立
家康公御自身じしん五百余人を引率いんそつし
給ふ、おし来り玉ふ(給ふ)を一揆き原大きに
驚をどろきすわや主君なりと跡をも見
すして逃散にげちつたり、爰こゝにおいて大久保
一党とう家康公に拜謁はいえつして今日の
危難きなんを御すくひありし事此虚きよニ
乗りて針崎はりさきを責破るへしと言上

しけれ八家康公聞し召尤と御同
 意あつて既に御旗を進め給ふニ
 よつて大久保一党御先手に進ん
 て短兵急ニ責欠る、一揆方にても本多
 言 弥・馬場小平太并ニ矢田作十郎等下
 知して防戦しける所に大久保七郎右衛門
 忠世 八大身の鎧を打振て苦戦し
 けるか十一人突伏たり、本多三弥此

本多三弥(一五四五―一六二七)：本
 多正重、徳川家康の臣、三河一向
 一揆にくみするが、帰参。
 馬場小平太(生没年不詳)：三河一
 向一揆勢の大將
 矢田作十郎(一五六三)：矢田助
 吉、徳川家康に仕えたが、三河一
 向一揆にくみする。
 大久保七郎右衛門忠世(一五三丁
 九四)：徳川家康の臣

躰ていを見て鉄炮てつぽうを以てねらひ寄る
を大久保急度くほきつと見ていかにや本多
相伝の主君に相敵するハ絶類せつるいの逆ぎやく
罪さいなりと声こへかけけれハ三弥面目なく
おもひけん返答ニも不及引入たり、然る
に此節矢田作十郎八渡邊源五左衛門わたなへニ向
て此所は要害ようかいの地にあらず、然
るに長居して軍するならハ必定ひつじきよう

渡邊源五左衛門（五二〜六四）：
渡邊高綱、徳川家康に仕えるが
三河一向一揆にくみする。

味方に利あるまし、よつて当手の
人数一手に分て岡崎勢のうし
るめう(妙)こくじ 奴国寺原へおし廻りて思ひ寄ら
さる所より責欠ら八敵兵おとろ驚き周章しうせう
狼狽らうはいして左あらば前後よりもみ
立く戦わハ是非勝利すへし、其虚
に乗して岡崎を責破るへしと軍
談しけれ(は)わたなべれ渡辺聞て尤然るへしと

同意して人数を引分妙国寺原ニ
上和田の間へおし出して取切るへし
とてわたなへ渡辺半蔵・はつとり服部半之丞等両
人を遣わしけり、爰においてわたなへ渡辺
源五右衛門八一揆を下知して敵をお
ひき伏地ニ落し入れんとおもひ立
けり

渡辺半蔵（一五四丁一六二〇）…渡
辺守綱、徳川家康の家臣
服部半之丞（一五四丁九六）…服部
正成（半蔵）、徳川家康に仕える。